

# 中国が目指す「新型都市化」とは何か？

◆ 大東文化大学国際関係学部教授  
岡本信広

習近平・李克強政権が成立して以来、中国では都市化がにわかに注目されつつある。農村外需依存、投資主導という経済構造をサービズ産業中心、消費主導に転換するためには、都市化は一つの有効な手段であろう。本稿は都市化への政策転換を歴史的に解き明かす。

**李** 克強が二〇一三年三月の全人代で首相に就任し、最初の記者会見で強調

したのは「持続的な経済成長」だ。これを指す上で新政権色が出たのが「行政改革」と「新型都市化」であった。「行政改革」は小さな政府をめざし、行政が持っている許可権限を大幅に縮小するものとして注目された。この小さな政府を目指す方針の李克強の経済政策はリノミクス (Ligonomics) として内外の注目を集めている。

一方、「新型都市化」という言葉も李克強が目指す新たな経済政策として注目されている。都市化率(都市人口比率)が五二・七%(二〇一二年)という他の諸国に比べて非常に低い状況を鑑みて、都市化を押し進め、消費中心の内需転換、サービズ産業の発展を目指すというものだ。

中国が都市化を積極的に推し進める背景について、歴史を簡単に振り返りながら整

理し、新型都市化の位置づけをおこなってみよう。

中国共産党は農村を基盤にした政党であり、経済建設は農村を主体にしていた。毛沢東は都市ブルジョアジーによる革命から農村を中心とした革命に方針を変更した。

「農村が都市を包囲する」戦略により共産党は政権をとることができた。農村に設立された人民公社は計画経済の柱であり、共産主義実現のユートピア的存在でもあった。

大躍進、三線建設時代には都市建設のために農民が動員された。増え過ぎた都市人口に就業数、賃金総額、食糧供給が計画を超過してしまい(「三つの突破」)、農民を農村に返す逆都市化まで実行された。

中国では、都市化というよりも、農村と都市が二元化する制度が作られていったのである。改革開放により経済発展の舞台は農村から都市へ移動する。とくに一九八四

年の第十二期三中全会では経済改革がうたわれ、重点は農村改革から国有企業が存在する都市での改革へと移行した。

沿海部の都市は開放され、外資導入の舞台となった。経済技術開発区は市街地の周辺に設置されたために、新市街地として発展していった。

沿海部発展による労働需要の増大は農民の都市部への流入をもたらしした。一九八〇年代は「盲流」として扱い厳しく制限していたが、一九九〇年代に移動制限が事実上緩和されると多くの農民が都市に出稼ぎにいった。現在約二億人の農民工が都市部に移住している。

農民工が増加した一九九〇年代、中国政府は郷鎮企業による農民工の吸収を期待していた。第八次五カ年計画(一九九一〜一九九五年)、第九次五カ年計画(一九九六〜二〇〇〇年)では、農民の都市流入によ

る都市化を期待するのではなく、あくまで郷鎮レベルへの集中にとどめておきたいという意向が現れていた。このような郷や鎮での農村工業化を中国では「城鎮化」と呼んでいる。

第十次五カ年計画（二〇〇一～二〇〇五年）から、都市化の推進が独立した章になった。都市化が計画として位置づけられた格好だ。しかし、大都市の膨張抑制方針は変わらず、中小都市の合理的発展が謳われたものの、基本は「城鎮化」であった。ただし大きな進展が見られたのが、都市農村の一体化に向けた制度的な改革である。戸籍、土地、就業、社会保障制度の改革が進むこととなった。

**計画** 画を「規画」（計画よりも政府コントロールが弱まった形の全面的長期的なビジョン）と呼ぶようになった第十一次五カ年計画（以下、規画も計画と呼ぶ。二〇〇六～二〇一〇年）では、「城鎮化の健康的発展を促進する」と題され、農民が中小都市、県や郷鎮レベルの中心地域に定住することがうたわれた。大都市においても、北京天津河北（京津冀）地域、長江デルタ、珠江デルタ地帯の大都市を中心とする都市群の開発、沿海、ハルビン―北京―広州の縦ライン、連雲港から蘭州までのライン（隴海線）、長江沿いを二本の横ラインとして一定の規模をもった都市群の開発を進めることとなった。これにより地域全体にま

たがった都市群の開発戦略が提案されたこととなった。

第十二次五カ年計画（二〇一一～二〇一五年）では「積極的かつ穏当な城鎮化を推進し進める」と題し、都市に住む農民工への配慮に注意しつつ、大都市に依拠しながら中小都市を重点に周辺への開発効果が高い都市群の開発がうたわれた。都市群の地域指定では、第十一次五カ年計画に追加して、包頭から昆明までの縦線が一本追加され、二横三縦ラインの都市群建設が進められることとなった。図でもわかるように、省都を中心とした都市化戦略である。

このように二〇〇〇年代に入ってから、積極的な「城鎮化」が進むとともに、二〇〇〇年代後半から中国の経済成長を支える空間的柱として大中小都市の積極的な発展が推進されることとなったのである。

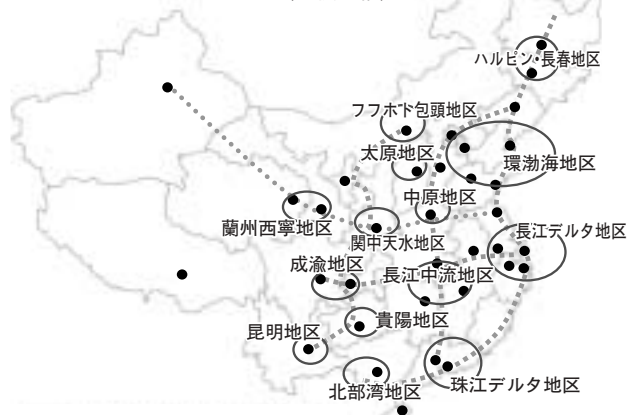
二〇一二年十二月に北京で恒例の中央経済工作会议が開催された。その中で李克強が打ち出したのは「新型都市化」である。その後二〇一三年三月に閉幕した全国人民代表大会で李克強が正式に総理に就任、約二時間の記者会見の中でも「新型都市化」を強調している。

中国で都市化となると、マンション建設、道路建設などのインフラ建設に陥りやすい。そうではなく、新型とは「人を以て本と為す（以人為本）」考えのもとで都市化を目指すということを意味する。ここでは、戸

籍で分断され、都市で受け入れられていない農民工を都市が抱擁していくイメージもある。

都市化はサービス産業を進展させ、消費主導の経済構造にさせる。ただしその主体は都市住民だけでなく都市に流入している農民たちである。差別的待遇を受けている都市部の農民がサービス業に従事し、所得を向上させ、都市部の消費を支える存在にならなければならない。「新型都市化」は都市インフラ建設だけではなく、分断されていた都市・農村の二元化を打破していく経済改革なのである。

図 中国が開発を想定している都市群（二横三縦）



出所：『中国まるごと百科事典』の白地図を利用して筆者作成。